

育児休暇期間が与えたもの

大杉 愛美（旧姓・林）

「教師になりたい。」そう強く願って入学した信州大学教育学部を卒業して、もう八年が経ちました。そして八年たった今、私は教壇に立っていません。四年前に長女を出産し、続けて第二子を出産したため、現在は育児休暇を取得して四年目となります。実際に教員として現場で働いたのは三年半ほどです。

振り返れば大学在学中、自分が「教師」以外の何者かになることを具体的に考えたことはほとんどありませんでした。それが今では「妻」であり、「一児の「母」」です。自分が考えるよりも短い間に、人生はどんどん変化していつています。

出産や子育てが大変だということは、頭では理解しているつもりでしたが、実際のそれらは私の想像を軽々と超えていきました。世の親御さんたちは本当にすごいと心から思うようになりました。二人目を産んでな

お、果たして子育てのしかたはこれでいいのか、答えのない問いを延々と考え続ける日々です。

教師は目の前にいる子どもと向き合うことが仕事です。しかし、その後ろにはその子のことを誰よりも大切に思い、ずっとこれだよいかと悩みながら育ててきた保護者がいます。初任の頃を振り返ると、私は自分の考えや思いを伝えることに必死で、その不安や悩みに寄り添えていませんでした。もつとやれることがあつたはずなのに。親の立場になったからこそ、そんなことを思うこともあります。

日々変わっていく教育現場から何年も離れることとなる育児休暇は、不安も伴います。しかし、「母」となつて得たものは数年前の「教師」としての自分にはなかつたものでした。どんな経験も「教師」としての自分に返ってくることを実感しました。

育児休暇として許されているのは、有難いことに出産から最長で三年間。今は大切な我が子との貴重な時間を、めいっばい楽しんでいきます。

（おおすぎ まなみ 伊那市立伊那小学校）